

時田・幻極・芳文の「我貌徒然」

tgenna.exblog.jp



by tgenna

台北旅行-1 はじめに

14日から日本建築学会埼玉支所台北視察旅行会に参加していた為、暫くブログを休んでいた。

アジア交流学会の御二人、JTCI 渡邊社長、台湾現代美術研究家の森さんの御尽力を頂き、台湾建築学会の皆様との交流を始め、素晴らしい機会を賜り豊穡な旅となった。

旅前夜爪を切るとき雪女郎
寝付かれぬ夜雪は降らねど雪女郎

今回私が旅行担当と言う事もあり、何時に無く落ち着かず出発前から緊張していた。不安と期待で寝付けず、また何度も夜中に起きる始末。始発電車で熊谷を出発、成田から日本アジア航空にて台北へ向かった。

天空高度一万雲無く日向なり
麗人をアテンダントと呼び温め酒
高度一万セーターの隣席眠り入る
寒天を降り雲貫けて光無し
緯度下り着膨れの身の苦しかり
冬の国から程も無く春の邦
漢字とは嬉しきものや春は春 幻極

俳句でこの旅をドキュメントしようと思いつつも、台北に着いて断念。素晴らしい機会を賜り、緊張と感激で再び最後まで俳句モードには入れなかった。

これだけの句で終わった後の、充実した台北を、何度かに分け報告をしたいと思っている。

by tgenna | 2008-02-17 13:11 | [Trackback](#) | [Comments\(1\)](#)

台北旅行-2 人々

旅の一番の楽しみは、新しい出会いを頂く事である。今回、極めて優秀な方々にお会いする事が出来た。まずは、その方々の紹介から台北旅行のレポートをスタートしたいと思う。

成田 10:00発 日本アジア航空 EG201便で予定通り台北桃園国際空港に到着。参加者7名全員手荷物だけで搭乗した為、そのままスムーズに入国手続きを済ませ、台北の旅が始まった。



空港から直接台湾政府外交部に直行。3時の約束に遅れる事無く外交部に到着。正面玄関にはすでに若い担当職員、林郁慧氏がお待ち頂いていた。



幸運にも私達は、台北駐日経済文化代表処の羅國隆氏のご配慮により 亜東関係協会会長 陳鴻基氏に表敬訪問をさせて頂く事が出来た。陳会長は、日大法学部に留学なされていたという事であり、今回我が団長も日大、我が敬愛する先輩と私も日大と言う事もあり、特別な計らいで実現したに違いない。同席頂いた美しく聡明な麗人、外交部日本事務会文教組組長 張淑玲氏から、「会長執務室での面会はほとんど無い事です・・・」とのお話を頂いた。同窓と言う事での陳会長の特別な計らいを只々感謝するばかりである。私自身、日大卒業を誇らしくありがたいと思ったのは今回初めてです、と御挨拶させて頂いた。外交部から直接のご手配を頂き、台北でのプログラムが極めて丁重に御用意されていた事に、驚きと共に、只々感謝する事に成る。

ガイドは朱正宏氏。なかなかシャイな好漢である。「外交部に御案内するのは初めてですし、私も初めて来ました」と言っていた。人間一目でおおよその判断が出来るものである。我が直感通り、今回の旅行を見事に支えてくれた朱さんの心遣いに心から感謝している。



外交部を辞した後、国立台湾記念館、台北の古い仏教寺院 龍山寺を御案内頂き、シェラトン台北にチェックイン。夕食は世界で一番有名な小籠包の店「鼎泰豊・ティンタイフォン」の小籠包を堪能した。

残念ながら私は、次の仕事に移らなくてはならない。月曜日は多忙である。一気に書き上げたい思いに駆られながらもこの続きは明日へ・・・。

是非明日も我がブログにご訪問を、お願いいたします。



夕食が早く終り、朱さんの提案で、台湾マッサージ店「滋和堂」に行った。昨年4月、台北訪問の折もマッサージ店に案内されたが、特別上手な施術だと思わなかった。だからあまり期待しないまま、今回初めて足裏マッサージを受ける事にした。マッサージ師は、写真の様に自信に溢れ見事な足裏マッサージを施術してくれた。つまり感動は・・・、足裏をマッサージすると激痛スポットがあり、それが我が病根のツボであると丁寧に説明してくれる。その店は漢方薬の店を併設していて、すかさず苦痛に顔を歪める私に初老の売り子が「傷んだ病巣を治す為にはこの漢方薬が最適です。是非これをお試し下さい・・・」と進める。曖昧な返事をしていると、マッサージ師は遠慮無く激痛スポットを更に攻め立てる。明日にも命が終ってしまう程のダメージを実感するに至り「それをひとつ・・・」と言う事に成る。見事な連携プレーに、気が付けば私は極めて高価な買い物をしていた。漢方薬を2つもである。後程聞けば、痛みに弱い男性陣は全員、高い買い物をしていた。こうして見事な連携プレーとシステムに感動しながら、台北の初日を終えた。



2日目、早朝9時から総統府の見学会をする。極めて厳重な身体チェックを受け、パスポートの提示をしてやっと見学を許される。ガイドをして下さった方が、林玉鳳さん。「折角総統府を見学下さるのだから是非私の話をお聞き下さい。やっと自由に語れる時代が来たのです。台湾の夜明けが来たのです。私は、伝えなくては成らない多くの事を皆さんに正しく語りたい・・・。」と総統府の歴史を丁寧に説明下さった。「私は、日本語と台湾語だけきり喋れません。北京語は出来ません。」と言い切る林さんの言葉に台湾の複雑な思いを垣間見た。「日本は、負の歴史も造りましたが、それに余りある貢献を私達にしてくれました。この総統府の建築も日本人の建設です。私達はこの事実を確り認識しながら、この建物を大切にしていきたいと思っています。」私は何も知らぬ自分を恥じながら、心からの感謝を林さんに覚えていた。予定の倍の時間を総統府見学に費やした。私は最後に林さんの写真を撮らせて頂き、握手をした。優しく柔らかな手だった。

その後、故宮を駆け足で見学。朱さんの見事な解説で1時間、必見のお宝を過不足無く案内頂いた。昼食は圓山大飯店「圓苑」、美味ながら朝食のホテルバイキングを欲張った為、程なく満腹。欲では食溜めの出来ない歳を実感した。

午後は、台湾建築学会理事長 江哲銘先生の御案内で台北の建築の今を見学させて頂いた。理事長の御配慮とお心遣いに一同只々恐縮するばかりであった。





最初に御案内頂いたのは、華山住宅大樓。完成間近な高級マンションの現場。その会議室で震大建設総経理 葉漢祥氏、同じく建築担当 施俊偉氏からこの建物に関する説明を受けた。都市景観を尊重しながら健康・環境共生建築、彼らは「緑建築」と言っていたが、の説明を受けた。また分譲マンションの室内、屋上緑化の様子を見学。思わずデジカメに消さずに残っていた我が屋上ビオトープの写真を披露させて頂いた。

次に、華山創意文化園区の見学。都市の中央に奇跡的に残った醸造所をそのまま残し改修をしてリユースする再開発プロジェクトを見学させて頂いた。廃墟に近かった工場跡を若い芸術家達が占拠した事から、そのエネルギーをそのまま掬い上げ再開発プロジェクトに仕上げている。台北市政府開発局 林宗傑氏を始め関係者から熱いプレゼンテーションを頂いた。



華山創意文化園区を始め、台湾大学薬学新校舎建設に際し、建設用地に立つ旧校舎を保存する為引き家をした事例、旧台湾市長官邸の再利用、歴史的建築物のファサードを残してビルを建設した保安街大樓の見学、等現在行われている新しい試みの数々を御案内頂いた。スクラップアンドビルドという安易な建設に走らず、確りと歴史的建造物を残して行こうと言うムーブメントに好感を持った。こうして同時多発的に世界で興る新たな価値観が、大きな潮流となっている事をここ台北の地で実感した。これらのプロジェクトは改めて報告したいと思っている。

最後に御案内頂いたのが古い台湾製茶店「有記名茶」。御当主の王連源さんが製造工場を案内くださり、最高級のお茶を振舞ってくださった。



夜はシェラトン台北ホテルの最上階のレストランで、江理事長主催の晩餐会にご招待頂いた。両国建築学会の益々の交流と発展を祈念して、何度も乾杯が繰り返された。午後から通して通訳の労を取って下さった国立成功大学建築研究所の黄琳琳さん、葉総経理、張組長、そして中国文化大学から建築都市計画研究所の丁育群系所主任、蔡耀賢助理教授、国立台湾科技大学から林慶元教授、鄭政利教授、国立台北科技大学から黄志弘副教授、楊詩弘助理教授ら多くの台湾建築学会の御重鎮がお集まりくださり、盛大なパーティーとなった。

参加くださった先生方皆様、流暢な日本語を話され、盛んな議論が交わされた。そしてそこ此処で台湾式乾杯が重ねられ、夜遅くまで和やかにレセプションは続いた。言葉の無いほどに、只々感謝である。

こうしてこれ以上無い充実の台北2日目は、終わった。

台湾語

「台湾語と日本語きり話さない」と言った林玉鳳さんの話がいたく心に残った、と昨日のブログに書いた。偶然目にした新聞にこの台湾語の事が紹介されていたので、メモをしておく。

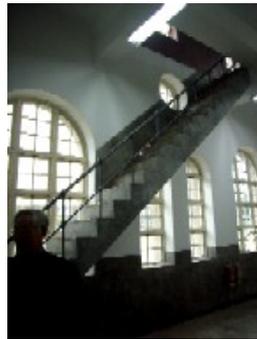
- 1684年 清朝が福建省管轄下に台湾府を置き、清の版図に入れる。
- 1895年 日本と清が下関条約に調印。台湾が日本に割譲され、日本の植民地統治が始まる。
- 1945年 第2次大戦で日本が降伏し、中華民国が台湾を接收。
- 1949年 中華人民共和国成立。蒋介石ら国民党軍が台湾へ。
- 1971年 中華人民共和国が国連に加盟、台湾は脱退。
- 1972年 日中国交正常化、日台断交。
- 1987年 戒嚴令解除。
- 1991年 台湾政府が中国共産党との内戦終結を宣言する。

この台湾概史をベースに、台湾語を考えると合点がいく。台湾語は閩南語(びんなんご)と言われ、福建省が起源で北京語の発音とは全く違うそう。大陸から来た国民党政権は北京語を「国語」と呼び、公用語として採用。台湾語は方言として酷く抑圧をされたと言う。台湾人は、戦前から台湾に住む「本省人」と国民党と一緒に大陸から渡ってきた人や家族を「外省人」と呼び、人口2300万人のおよそ13~15パーセント、このような状況の中で現在方言の復権が顕著であると言う。

台湾人意識も急速に高まり、若者には外省人と本省人の区別も薄らいでいるそうである。直ちに台湾の独立を求める人は1割以下で横ばいのまま、「台湾人意識の高まりと、統一・独立への志向は別問題」と言うのが現状、と報告されていた。

ともあれ言語が2度も蹂躪(?)された歴史を、私はリアルに実感出来ない。能天気を楽しんだ台北旅行をいささか恥じる思いさえしている。この旅行が無かったら見過ごしているに違いないこの記事が、昨日の新聞に掲載されていたというシンクロシティーにも感謝であるが。。

台北旅行-4 華山文化パーク



醸造工場の歴史は古く、1916年創設され、清酒、胡蝶蘭、人参酒を専門に製造していたと言う。1922年日本政府が専売制度を実施して大規模な工場建設が始まり、米酒や各種再製酒などが製造された。終戦と共に公営の「台湾省煙酒公売局」によって経営されるようになり、醸造所では様々な果実酒が研究開発され、「果実酒工場」と呼ばれていたと言う。1987年、都市化の影響で工場移転、醸造所は休眠状態となった。1997年、放置されていた工場跡地を各領域の芸術家達がアートスペースとして利用しようと言う機運が高まり、「華山芸文特区」と正式に改名され、多くの芸術家達の創造の場として活用されるようになったと言う。

その後「行政院文化建設委員会」が管理運営する事と成り、2003年から「橘園国際芸術策展(股)有限公司」が引き継いだ。自由な状況の元で様々な芸術的エネルギーがストックされる中、施設の老朽化による漏水や



倒壊の危険を回避する為 2004年から短期修繕と全体計画・コン

セプトの新たな策定をする為 1年間封鎖をして全面的な整備をしたと言う。2005年、旧工場ゾーンと公園ゾーンを合わせ「華山文化パーク」として新たに開園した



思うに、この好ましさは歴史的建築物の保存と言う意識以上に、施設の有効利用が明確に優先されている事である。必然的に中華的な装飾は一切排除されて、結果的に普遍的なモダニズムを獲得して非日常的な触発空間を創り出している。歴史は空気に程好く浸透し、心地よいユニバーサルスペースを創出していた。このニュートラルな空間があらゆる芸術活動を許容し触発をしてくれるのだから、羨ましい限りである。今後様々に充実と改善を行っていくので見続けて欲しい、と担当者は語っていた。

若い才能が、台湾の新たなアイデンティティを求め、歴史的建造物の再生・保存に力を発揮している。「華山文化パーク」に限らず、見学会での担当者の目の輝きと熱いプレゼンテーションが強く印象に残った。



台北旅行—5 林安泰古厝

台北旅行3日目最終日は、「迪化街歴史街区」の散策と「林安泰古厝」の見学を行った。

林安泰古厝は、220余年の歴史を持つ邸宅である。1750年半ば、福建省から台湾に渡ってきた林家は、後に良く財を成し、この閩南(びんなん)様式の邸宅を建築した。決して豪華な建築では無いものの、質実な美しい住宅建築であった。台北の都市計画が優先され、道路拡張に伴い解体撤去される事が決定されていたそうだが、専門家や多くの市民の努力で規模を縮小し、現在の場所に移築再建されたと言う。



邸宅の前には半円形の月眉池があり、中国風水の真価が最も発揮された造形となっている。

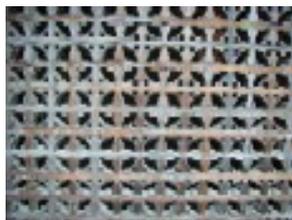


つまり防御、防火、気化熱による温度コントロール、養魚、給水などの機能を持つとされる。池を回って安泰厝に近付いて行くと、ヒューマンスケールの構えが見えてくる。三川門の石畳はバラスト材として使用された圧船石と呼ばれる苔の生えない滑り難い石だという。門廳を抜けるとコートがあり、それを囲む形で各室が設えてある。中国本土の気候風土に対応したコートと都市生活におけるプライバシーの確保と言う2面性をクリアする面白い空間構成である。また、正面の正廳の棟持梁だけが彩色されている。宗教的な意味を持つものなのだろうが、押さえの利いた美しくも粋なデザインであり、そこに居住者の知性を私は感じていた。



何とも気持ちの良い住宅建築で、素直に住み込んで見たいと思わせるヴァリューと魅力を持って居た。

中国建築に詳しい研究者の友人は、団体行動を乱す程に立ち去り難い様子であった。清掃が行き届いた清潔な住空間と精緻なディテールは、彼の感性を十分に虜にするのもむべかるかなと思われた。また、民族博物館としての確りとした管理



に、台湾人の誇りとアイデンティティーを実感する事も出来た。



「台湾も異常気象です。」と言われる程に台北も寒い日が続いていたが、最終日だけ春光が心地よく射した。

春陽の一時射して搭乗す 幻極

台北13:20発 日本アジア航空 GE204 便で帰国、何とも充実した台北の旅であった。

by [tgenna](#) | 2008-02-22 09:27 | [Trackback](#) | [Comments\(1\)](#)



後列左から：時田 三條 樋口 八代

前列左から：高岡 市川 関口（080215 圓山大飯店にて）